episode 7　佳代ちゃんへの てがみ

投稿者　大塚徹子 さま（埼玉県）

『おおきな きがほしい』
佐藤さとる 文
村上 勉 絵
偕成社　1971年

大好きな佳代ちゃん、元気にしていますか。
音信不通になって、十年余りが経ちますね。私は今でも、大きな樹を見かけると、枝ぶりを吟味しては
「この樹はどう？」と、佳代ちゃんに相談しています。

あれは、小学二年生の時だったよね。
社宅だった我が家の廊下で、絵本と同じ樹の上の暮らしを毎日のように描いていたのは。
『おおきなきがほしい』と、カレンダーの裏紙と色鉛筆さえあれば大満足。
家を乗せるにふさわしい樹について、真剣に考えていたね。
ページをめくったり戻したり、絵本の世界は私たちの内側にあって、勝手に展開していくものだから、
イメージに描く手が追いつかないのだけが困った。
母が用意してくれた三時のおやつ、南向きの廊下の陽だまり、
時間がとまっているかのような至福の空間は、今でも体が覚えています。

二十歳そこそこで結婚した佳代ちゃんの新居に泊まりに行った時、
狭い台所に布団を並べて尽きることのない話ができたのも、
数年後、離婚した佳代ちゃんと、ピザを食べながらおしゃべりした時も、
気の利いた言葉や慰めの言葉は言えなかったけれど、
幸せになって欲しいと思う私の気持ちは伝わっていたと確信しているよ。
仕事が忙しくなっても、年賀状で近況を伝えあっていたから、何の心配もしていなかった。
三十歳過ぎて、再婚を知らせる葉書をもらった時には、「さすが！」と納得したものです。
ただ、程なくして、その結婚も終わりを迎えたという知らせを最後に、連絡が途絶えてしまいました。

ある年、年賀状の返事が来ないので、「もしかしたら郵便配達の手違いかも。」と自分に言い聞かせてみましたが、
胸がざわつきました。二年、三年と続けて返事が来なかった時、
「そっとしておいてほしい。」という佳代ちゃんの声を聞いた気がしました。

ねぇ、佳代ちゃん。描いた絵は、もうどこかにいってしまいました。でも、あの絵本は、今も大切に持っているよ。
佳代ちゃんと一緒にページをめくって、笑い合う日を待っているからね。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2021」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

ファンタジー作家、あらわる

2017年２月７日に88歳で永眠された佐藤さとる氏は、1959年、『だれも知らない小さな国』(講談社)で児童文学界にデビューすると、日本において本格的なファンタジー作家が誕生したことを示したのでした。『だれも知らない小さな国』を皮切りに、半世紀にわたって創造し続けた「コロボックル物語」シリーズは、令和になっても子どもたちの想像をかき立てている小人の世界です。

佐藤さとる氏が生み出すファンタジー世界は、児童文学評として賛否わかれ、厳しい批判もありますが、日本でファンタジーの領域における中心的存在としての位置を堅持して、現代まで導いたひとりであることに間違いはありません。

佐藤さとる作品について数々の批評を残している安藤美紀夫氏は、1973年８月の「日本児童文学」誌において、『だれも知らない小さな国』が当時を指す「現代児童文学」の「黎明を告げた作品の一つ」であることを認め、「本格的な空想物語の方法確立に役立った」と評しているのです。

「コロボックル」シリーズにならぶ代表作が、『おおきなきがほしい』です。自分より小さな生きものたちと交流するファンタジーで、初出は学研の月刊雑誌「母のくに」1970年６月号です。翌1971年には、全面改稿された単行本が偕成社より刊行され、半世紀を超える人気作になっている空想物語なのです。

木登りできる絵本なんて、ある？

佐藤さとるファンタジーワールドに親しんだ方に共通するひとつの思考過程があります。その名前を聞いて、脳内に湧き上がるのは村上 勉氏のイラストで、佐藤さとるファンタジーの象徴ともいえるでしょう。実際に佐藤さとる氏は、村上 勉氏とコンビを組んできた仕事のなかで、心に止まっている作品の第一を、『おおきなきがほしい』と公言しているのです。

「おおきなきがほしい」と願う主人公かおるの心の中に大きな木が根を張りだすと、それまで横開きだった絵本が縦開きに変わり、根元からてっぺんまで、ぐんぐん伸びていく様子が７場面に分けて描かれているのです。読者も主人公といっしょに木登りを体験する、想像的アクションの起こせる絵本は、1970年当時も、2023年の今も、驚きの一冊です。

佐藤氏には、このアイデアが先にあって、おそるおそる村上氏に持ちかけたところ、おおいにのってくれて、実際に２メートルに及ぶ“大きな木”を描いたことを明かしています。そして、「絵本はやはり絵描きさんの腕次第」とも綴っているのです。

この構造を活用した演出をすると、子どもたちのワクワクドキドキは最高潮にあがります。絵本を２冊買い、大木の７場面のページをバラバラにして順につなぎ合わせます。縦開きのページで、１ページめくるごとに、木がどんどん大きく伸びていくという手法です。

子どもたちの反応を想像しただけでも、実践したくなるでしょう。

佐藤さとるさんに敬意と感謝をこめて

佐藤さとる氏の創作姿勢は一貫していました。「自分がおもしろいと思ったことを、自分の意志のもとに書く。他人の力のおよばない自分だけの世界を作って、その中で作者のわたしは一種の支配者となる」。この発言もまた、批判の的となりましたが、氏自身の幼年時代の楽しい幻想から紡がれるファンタジーは、昭和だけでなく、テクノロジーの発達した令和の子どもたちの空想へとつながっているのです。

佐藤さとる氏の功績は、大人になった子どもたちに語り継いでいきたいものです。

文献

1）佐藤さとる：だれも知らない小さな国，講談社，東京，pp.200-201, 1959.（初版の挿し絵は若菜 珪）
2）安藤美紀夫：佐藤さとる作『だれも知らない小さな国』について，日本児童文学 19(10)，pp.68-73，1973.
3）森久保仙太郎 編：絵本の世界 作品案内と入門講座，偕成社，東京，p.217, 1988.